



燕石  
十種  
戲  
作者  
小傳

二輯

壹

4冊  
679  
10



16  
679  
10

戲作者小傳目次

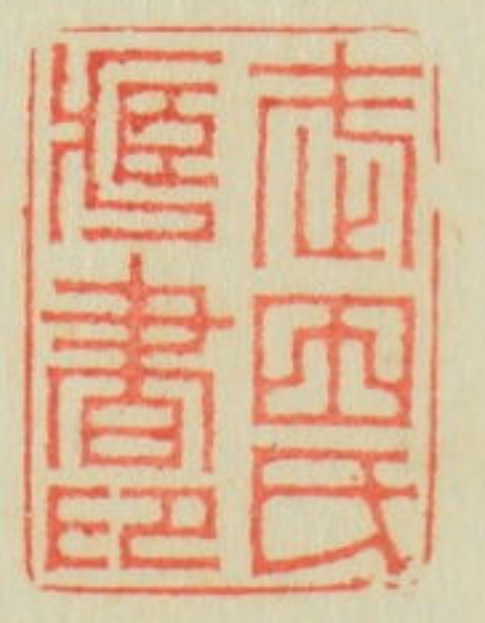
上字

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
窪	取	黑	純	大	朱	四	唐	喜	齋	因		
田	橋	也	定	樹	樂	方	未	之	川	清		
俊		名	丸	園	世	山	三	二	春	兵		
滿		武			江	人	和		所	衛		
		部										

~~下字~~

下字

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
楚	田	黑	葛	齋	平	唐	通	萬	芝	凡		
滿	鏗	木	唐	川	秩	衣	笑	象	全	來		
人	金	九	好	所	東	橋	所	交	交	山		
	魚				作	所				人		



印

振踏亭  
櫻川杜方  
鬼武  
市塚子  
櫻川慈悲成  
可笑  
小枝繁  
自惚山人  
祭和樽  
全亭三直  
閑亭  
北靜廬  
雀屋南北

梅暮里谷我  
樹下石上  
二代自喜三二  
內新好  
二代自萬象  
德川行所  
高井菖山  
橋香保苗  
黃金厚九  
西來居未佛  
东里山人  
壽阿彌  
瀬川如鼻

白頭丸抄漢  
松島半二  
向榮樓欣堂  
林屋林泉  
十返舎門人九人  
山嶺松亭琴我  
為永春水  
龍亭鯉火  
香來齋王粒  
神屋蓬河  
揚春亭慶賀  
忍園常丸  
玉樓花紫

葛葉山人正二  
室由子所  
花笠文京  
式亭門人拾四人  
標亭琴魚  
琴川  
園山鳥  
千代春道  
东西尾南北  
鬼卯  
江南亭唐立  
二世德川君所  
美園垣笑顏



事唐を引奉りたるの如くや此唐を敵と近以病死したるにききて  
之をいしをくしむるもおとしむるれらるる金平を伴う國唐にやうして  
惜む也思ふも字もたきつゝか斯作の真意字年中ふ死せし  
中見ゆ所此人の墓前つゝまこと不知金平とあり本邦の久唐庫ハ  
三十程有り  
此國唐を敵死せたる後新作の事有りも尋らて有きたるの狂  
有に思ひせし形もん此水故金平と唐庫し一尋に近移り  
た處のり居作出て其此の人氣の如形此の居る古唐庫有り  
唐庫の如くも尊保より宝曆の比まると本邦思本ももき出  
柄金平ありしと云々如く唱歌形も有りしと云々の比の飽  
今も金平の居るの如く晒木餘足感底を角をとをて  
又金平煙字有り今も形も又金平翻金平年唐形も有り  
強しをてし意形も有り

四字下

風来山人

名國倫字士彙旭原を舞一紙も書堂又天竺原人戲号  
其通稱を平智原内まつゝ初光森羅萬家といひし唐を  
号を門人森島中名<sup>抄</sup>抄<sup>抄</sup>又原中福内奥の居有り  
讚岐の人なり物産の字を好むは名も有りて唐醫田村元隆  
を師とて學びて出唐の唐名高且大原布を製し一<sup>抄</sup>キ<sup>抄</sup>テ<sup>抄</sup>を造  
風砲風船を造り作る程毎々人の知るるに唐作たり一時の戲れ形  
り也我書永八己亥年十二月没せしと標榜の總白寺の墓  
所友人村田元伯述之

法華智見靈雄

著述

- 風来六部集
- 根形一草
- 全法編
- 志道軒傳
- 菩提樹系
- 仙術金形集

一字下

三字下

五字下

馳腹音大通

飛花屋集

男七弟の周

三子下

此餘畧之

陰本著述

神皇系にの度

世荒魂共田神應下智智由の漢

忠信つらは宗元

前老花古端鑑 原七女字紙

嫩於系系宗元

宗生原全信稿 長狹禊衣

三子下

齋川春所

姓：原居格通稱を倉橋壽平一と不在詔を毎と共  
居を酒一と不博又壽山人を号し戲作小意小志所と居  
のふ縣外少島原の家居や一と若川志日所不助何と意川  
やつ少住居と一と居るし水と一と信を山石燕の學ひと自馬  
作の冊子也 他の冊子をも馬中つ一後不勝川志壽平と字もつ

三子下

下安永四未年の著述「全銀先生宗元傳」二冊を影写し那那  
の題向大少行れ全五申年「高樓南行脚日記」是又大論とそ  
實成を身の前紙の案ありて一考は是より志所の居方小論を究  
政元己酉年七月七日没生四若新宿書通り信光寺（大宮下）  
葬（中津藩方加藤）法名 寂靜院之鄭安信湛水  
墓の左傍に辭世の語有り曰生涯苦樂甲六年即今脱却浩焚  
歸天

三子下

著述

禊文當り物

花名かこ水ん坊（文軒先生云此書は自撰書  
先生の傍に撰を伴作り）

○三外増辨（辨）を丸（丸）○自鼻峯高樓男

○三幅對紫雲我（我）○間遠曲輪（曲輪）花

○芽衣年一尾日記（日記）形

○詞賦何とら（何とら）いね（いね）

○来古集若菜の語酒天室句占（若菜、其は若菜なり、輕鮮の語  
若菜、其は若菜なり、輕鮮の語、若菜、其は若菜なり、輕鮮の語、若菜、其は若菜なり、輕鮮の語）

下字二

禊史のたつもの  
全とせんせぬるのふん  
りりまんまのらんきや目元  
を形み解りてらんあやう  
さんふくつらむとせとそん  
あやめとそんとあやうとそ  
とそんとそんとあやうとそ  
らんまふや文武三を  
がらんふひの志ををし  
存善馬の膳儀三代元  
れりあやうとそんとあやう

一字下  
二字下

又酒家却何

子下  
二  
婿形院後法（其子つらみおのむすひのまゝをんを）  
婿風佐通（男世の名敷少道身存の風貴持まゆ）  
馬をくらせり其比の風後を合んる也

芝全文

通稱山本藤十郎とて大藏院の狂言師之西久保神若所り  
住居を實録五癸丑年 病て没し行年

得史より物  
大つらみおのむすひ  
おらんや仁まきん  
十四年せむきくち  
右全上録

別行  
○此書より戲居大の發見天朋元年辛丑年分開作也  
○此書より大進千録本（海物書）合羽大佛縁起（半録本）  
煙籠著多を其比。南久大通佛開法。通聲女暫  
是亦初作ある也

喜三二

得史よりもの  
三つ坊のふのまき  
入七人けやう  
形をみみとつま  
文武二道名通  
全上

秋田屋の士通稱平尾平松を以て明誠堂を號し戲居喜三二又  
島山入を以て狂言の柄圓持の住何。俳諧の月城狂詩の轉長  
齡まて天壽とて晩年世を辭して利譽を居若形也人の形  
也戲居を自平河を居つて喜三二の稱号を若菜亦其後  
又父代十登商五月七日自法行年七十九歳川海守其墓何  
著述。古杉木（手紙本） 藤原信房（下平陸軍のまきをせり）  
見まて形もまの文侍ある

萬象

姓の牛原居牛原良字の慶臣居桂初稱森島申南也て桂川甫周  
法眼の舎中や天明四年の得史の作何。平賀屋内の人の中を森羅  
萬象の号を譲らる文元月風ま山入を居て天竺居人とも号して狂  
居を竹林の爲輕てて蘭學の業餘已ふきをその戲作を形す

得史よりもの  
おらんや仁まきん  
十四年せむきくち  
右全上録

善哉巧多し師の風来中伯仲也

○田舎芝居わが芝居 太平楽巻物全上

唐来三和

加藤氏何事也乎是生本所於井所の妓院之和泉を原流と稱す  
或人云原流は家也一と書歸州を重きや乎和泉の形も彼に似入  
丈せしとて不伝年未定深川浮心守中世星所  
國文の和泉形も天下二面鏡の柄鏡全上

善哉の歌の如く母の如く此の風を重きとすこれと輪の林を形  
著述。善悪邪心と定 忠臣一心の蔵  
通神三教の色十布舟 和唐珍解全上

市橋女名寧一字子重橋本、師号也俗稱也字次とて通曲也

其有述天朝神  
床物好茶詞藝  
通篇蓬齋半島  
女天狗  
一升酒底抜男  
芝居好  
免ふ人仙の如く  
あふり口  
法代系手時指

少後居一生之毒手とて市橋の仙なり傳説を作らる每承平年小  
寛政の初より若千巻を著述其意甚意教諭を以て多し故  
世の人教訓の通第とて文化九年八月十七日没去行年七  
十四傳子孫言守の葬石  
法名 覺法入王心  
聖唐（因所傳所記） 善具を基とつてたふり友人著傳書語を存  
道寧生きたるに著述大方世の人の常ふ法を著して去り如  
形りやんや

四方山人

名覺字子重南無也号一又智山中号香花園在獨第遠櫻山  
人亦別稱と通稱と目七た處の御和直と云ふ牛込小居住後  
跡河原少初初狂名を四才人ヤツの居高名と改む唐名橋  
所書不狂歌の旗しと海内を風靡る文政六癸未年四月廿日  
没年七十五







文政七年庚寅三月二十四日

吉田勇雄識并書

戀川好所

紀氏在真顔在歌堂也早く又四方歌垣に早く通稱を北  
川嘉多楽せし不教音を何處に作して山歌を世に計り餘を  
嚮んで業をせし多縣計を愛水の意に慶長和歌恋川を何處に  
て傳史を作らざる師の存不疑して好所と早く定改年牛鹿  
板山人に異名存して昔年の作何の四方歌垣に狂歌を學びて其  
名を鹿傳部真顔せし不居年能務を牛鹿と号して方不訂に因  
て能務を傳の早く又著者よりして好所を相とす不訂を伝  
何の不傳りありし此を相りし始をせしして文政七年五月二日家  
中宗道早を與許せし此希く打鳥子爲所を餘り文政七年二  
五月十日自病に没せし年七十七在川三井瀬橋極楽水光園寺に

葬り

法號

俳諧歌場壽忌言福阿真顔

辞世

味く食ひ飽らうと分る何ふ人七十七南を何所傳伝

著述

元和安賣舞商 長者のまゝくりふ

十の天明五乙丑年刊行

定録

當字之唐菜 其入 金言年むりし 此詞を其入

右恋川好所作を何の何れも所作

大仕掛

三思の我

文政五年五月年移を板豊馬鹿鹿我  
山人の志をて序又ふ志能の存何り

○狂歌堂常の方樹園を其年むりしして其を文記十四丁丑年牛  
村彦彦と世狂言大石と著板「花」雪和名年花の故招東彦其  
市山在井杜若と其年石和名と文記八年未年より當年まで七年  
のる一死の節先形よりして愛双方の連年より進先中より終る終  
終る一死の節先形よりして愛双方の連年より進先中より終る終

是より一海老丸と宗 其年甲寅山人若狂そ尼物をりめり飽感  
十石の例をり形を 其年乙卯山人若狂そ尼物をりめり飽感  
新なる其年 膳 くらさきり 其年乙卯山人若狂そ尼物をりめり飽感  
しあ人何心形く 戯場を弄れり山人中々り秀佳杜若の牛  
直り男の自其方達と若く其年乙卯山人若狂そ尼物をりめり飽感  
の如く水魚の交りかつて生るや私膳の血事一りしをを  
其年の名を狂歌

真顔

是まのだんまの幕引ぬ志氣もお肩のもまの棒能

飯 成皿

膝をひきよの牛むごの下持を云んつをのるたはた形

紀定丸

初号其系ノ會輔をての通稱を古久保和やふ牛込豆腐

而敷不流守 狂言を師と其名高し 堂双紙の作人天明四年冬五  
年丙午のこ二三部所  
表出右某之天保元年乃齡八十余して没せり也  
辞世 狂言師もろろ 狂言を形りかき 紀定丸も何と死形也  
世

若唐丸

喜多川氏 本姓谷 柯理早を耕書堂とての通稱を其年乙卯  
乙卯乙卯免若系大門の住りて若系細見を齋屋とて通稱し後  
りて五舞や形水り逸人 画史云 實政元年己二月廿日 享年四十八  
歳 其年山名法寺 寺碑又りて石川五右衛門 撰

著述 本樹真猿浮氣嘯

○雪磨云唐丸を頗使氣り故尔又其何者若系之放馬形

乃を以て所擔し又會審中形之賦を最出を厭ひこれに是をた究み身  
をたて居をたせし人を行つ四山老翁之と摩馬琴抄其年之文已  
居何れこれた多し吾人よりりてあり也を實改九年六月三日後此に  
早世也

黒山島式部

山東京傳妹形、狂歌を詠、戯作の筆致三部行、天明の末

著述 人石思際井 三五一大通本也

黒木

北齋翁一為云京傳方不寓居也、黒山人也つふらこの學者  
少く京傳の片腕形ものより、居在海尾三島縣に任居、狂死  
此也云ふ

著述 女莊子小蝶夢 天明三年出板、此一部のみ

飯橋

蓬萊山人也号高崎屋の家長之修稱河野、安永年  
中より晒前中の作を著し多し、享和元年の年中、其古部も何  
れあり、其後を君の戯作を禁らるるなり

田螺金魚

神田所送の子形、  
傾城席の巻也つふ少冊大に形甚く、享和元年の作也、  
一事千金少冊一冊

窪田俊満

尚在堂中号一安之康之稱之作居を南院伽藍茶室神  
田富松所居居在狂歌をうく一画をも能くす為一翁は  
圓向院前猫茶室の筆を戯作して一通り猫のまをこれ  
とつて竹双銭何方より一市未見

### 梵滿人

南仙笑之舞は通稱柳を布とて芝宇田川所の業群形  
歌并の字紙を伴身して其居を築き文化四丁卯年三月九日没  
西久保心光院に葬り

### 法号 口口但受樂公和居士

墨川中平の芝神明宮の所住居一医を業として仙白を稱せり  
商翁を板木師形りせり

著述天朝補  
并録齋堂通室

### 振路真亭

猪井氏名身居通稱と名乗りつる本船所の家主と初免修  
所不任居居画の所居清七不学お居年浪居し川崎在左師河系  
傍居しと自語指事して業をせし沈酔の上堰居居をりて没  
せり

### 著述

- 自惚鑑小冊。客衆下花表小冊。意妓之口小冊
- 見通三冊相。伊呂波醉語傳中本。推話中本
- 子代異義娘七变化物語五冊北馬画當り。春夏秋冬五冊
- 陣吹妹背山六冊北馬画。俊徳丸五冊北馬画
- 復讐言猫股屋舖中冊北馬画。今西行東下り二
- 成田道平全駒二。子社詣二。巳日待二
- 振路真亭吐白記小。玉の蝶小。格子戯話小冊

梅暮星行我

蘇首字星之苗星候の屠士本所埋掘師住居大目附後ヲ著云通稱及所与たる

著述

金花映五北南画 山廿社太丈五北南

傾城買二北南道 全三編 廓之癖全三編 曾之程

契情買言告白契情買中 全二編 廓之櫻

白狐通 甲子夜話

貞操七北高 江户氣質浪花櫻英泉文政五

櫻川杜若

岸田氏俳諧をよみし言葉集後知りし芝神旺るに依る

著述 大通記 大古つち千本様

樹下石上

市中山人々早と羽分山形之屠士一を振系五市空園をよ作凡  
八種是屠人余似たり後年自出屠士のやの三を著述守子孫を  
振系早左馬のまをふ

鬼 武

感和事々早と和号通稱新錦曼物とつて或屠士之也我

筆初の通一撃才劍の達生法仕を辞し之市井の徳れ戯作を

以て業多し画を寫し山公羽の字を自ら語らる此字は此

近名に住居し後新寺町に移る

星雲の真言實政中飯田所の居し此作屠亭の飯頼山行

著述 自来也物誌謹考十冊北馬画 大と紙の文化四十年古板云

歌舞伎狂言志々之也此のせし不在今大書留り也三代目市川團藏自筆の後の出来







之指以之不振方之形方也

或入言二如免鞠師形之。後為所出之。之業之也。之。

著述 持來錄者錄屋 天華阿房樂

二代自萬象

森羅事又南湖子也早生初早二月自竹秋乃輕之七珍萬室之  
早生通稱福島弘法之云極田善考人所其菓子之玉保二  
辛卯年七月去日没生年七十西中初孝年妙定寺小宗師

法歸 叙云運信士

著述

活东子云萬象孫可極々々名早二新寫也早生幼名德平中云  
後其續之仁考人云不重性篤實温厚也謹古之嗜之俳諧者  
其俳号を錦雪尾三雅也今丁安政理為在獨獲田中住長一

菓子舖 錦泉堂 形

七珍萬室 萬象事門人

其傍上寺門前公羽也之不餘菓子舖南之室之之後二代自森  
羅方之也之段居也。世之新也。故其在歌師之形。四子五子  
の弟子也形也。

著述

海軍集入 卷 三 冊 酒 齋 卷 太平記 上 全 鬼 心 通 算 板  
苦者集元ノ 二 冊 同

可笑

伊藤氏猪与八也稱之天明三癸卯年六月三日没在行年七十  
七四二若大才之理性寺小宗師

法号 玄如院 要山

雪庵云云方より右側より日蓮宗之法号云如院要山日昭云何  
寺傳云云の仔細云々、少名川舊名區舟不仔細云々云々

慈川行所

春所門人王能七より寺傳度身長に著述の事多し云

著述

百福物語

小舟伝

春所と此云々

所撰云々

序書所全内所撰云々、口更敷、歴形、云々の條あり

紫云の主人 實録十二

依稱不知品川名し住居して画をうりてせしむる當り、南門  
嵐や野草せし酒肴布之品川の定を著述して物有る所云々  
南の路や野に出るせしむる所多し、大におや云々

著述 豊功郎生日記 見物左工門

小枝 繁

鋒山中歸生又歡臨陳人々是を通稱森木七言詩といふ、擊子劍  
中長ト筆のし、亦、中府の所多し、般舟之初免青山焰破云々  
岸、後四若忍系控所 此所云々

著述 東嫩錦 五北馬 柳之系 五北馬 玉系 徳 十北馬

催馬樂奇談 六北馬 小栗外傳 三編共十五北馬

古徳花字伝 四北馬 景清外傳 国直

橋供畏巻 国直 玉迺 石所 五英泉

高井 蘭山

名伴實字思明通稱文左衛門中つふせ之仔細云々、能る云々、カ  
録云々、又或人云原は藤本某の用人なり、其著述、教訓  
の事又云益の事、又禮部云々を編述して、其仔細合著の

作形

著述

三国妖婦傳 十五北馬画 享和三年 孝子嬾物語 五北馬 享和三年  
那智の白糸 五全上 星月お顯咄録 十全上 文化七  
鷹仁記 大平 英泉画 水滸傳 三篇 享和三年

自惚山人

横山所著の自惚田屋の事やうな煙草の之を産業を獲ては  
野暮者のと後を治る北水や果して天久曆第十日の月と指南  
此の事と諸名抄りせし中終を能くせしとて北馬画の  
話あり

檀香保苗

北馬画著身又高南楼中身は山家考云の事やうな飯田所堀苗

水任所之煙草を賣りて業々 在歌せりて 是處作三三節形

祭和樽

此の事や歸て通稱武藏屋井とせし 神田所作の住せ  
在歌師之或人云とて 藝徒形とせ

著述 神本抄達摩心學 三冊 岩手板 福神全大帳 二冊 是處作の初あり 享和三年 此の外中本の作も有り

黄金厚丸

神田鍋所の住居 仔細なる者云云 不紙問屋形

全草正直

麻布の住業品を商ひて業中人五例 三冊 用の在歌師と

著述  
北馬画内所画會 中三冊

著述

金鈴橋双紙薩摩五舟  
英泉画 嬾怪蛇物誌五英泉画  
在歌今昔物誌文政十一年發行

西来居未佛

尾分候之番中少て毛受善士此を以て万人之初号亂草因一  
寸在師也之是又五測の在歌師也

著述

志在龜合鏡馬坊校  
文政十一年發行

閩亭傳喚

築北江堂重門前本多屋の屠士也通稱閩亭四節也山東  
京傳

著述

孝行娘妹背仇討六冊豊彦画  
文化五泉市板  
復讐核田ケ劇六春翁  
三上 新撰生妻市の始豊彦画

運糧長者了體二冊七画  
文化九

東里山人

九陽亭也号し又自鼻山人也号也麻布三軒家も住居公の興  
事たり通稱を細川浪士也といふ血如斯印章有り傳ふ京傳  
鼻士の山本尾が門人形

著述

唱妓  
美珠 竹籬の花 契情肝意志 此不致多有り畧也

○活字も云吾師之物老人諸小浪浪市晩年漂泊して其知通し  
傍接を以て以て奇方妙術形を以て山也其心も一を盡し  
後辭一之曝衣傍に有り俱も未降之活字也其後其子孫傳四日市  
少也店も稱之有り声聞也七也其劇原を以て其也

著述

金鈴橋双紙 薩摩五冊 英泉画 嬾婦蛇物語 五英泉画  
在歌今昔物語 五文正十卷年發行

西来居未佛

尾分族之藩中少之毛受善其在之万人之初早親筆圖一  
寸法師之不足又五測之在歌師之

著述

志居龜合鏡 馬宮校 文政十巳丑年發行

閨亭傳笑

筑紫地味堂裏門前本多屋小房士也通称閨亭四節之山東  
京傳

著述

孝行娘妹背仇討 六冊 豐彦画 文化五京市板  
復讐猿田ケ劇 六春箱 全上 新撰生妻市の始 豐彦画

運種長者下體 二 同七画 文化九

東里山人

九陽亭也早之又自鼻山人也早之麻布三軒家之住之公之興  
事たり通稱を細川浪士也早之 血如斯印章たり 傳之京傳  
自鼻之山本尾が門人形

著述

唱妓 美珠 籠之花 契情肝意志 此の教多かり 畧也

○活系之云吾師之物老人諸不浪也年晩年漂泊之其知通一之  
傍獲之云之て奇方知形也之山也之我之志之て其也之て  
傍獲之て曝之傍之也 傳之未傳之て活斗也之 傳之其傍四日市  
少之店之稱之て之て声聞也之て其劇原之て之て

静廬

名慎言字有和号梅周也通稱北三右衛門也其家根  
其身形不欠細破折針金也其家号を元也其阿弥の  
水之狂歌を徳也其後其を廬也其家号を元也其阿弥の  
三三右衛門の一人形也嘉永元年戊申年三月十九日没其  
地中教受院の葬也

法号 高岳院日照信士

○活末子云三三右衛門の常行を云右衛門の  
号三三右衛門の家号三三右衛門の形也  
住持也

壽阿彌

毎年法進勤執事  
嘉永元年八月十五日  
其病をく疾を治す  
也其阿弥の形也  
活末子  
俗稱真志を五右衛門作す神田北石所住也  
法号子  
也其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也

言作者室田壽也名を請て元自慶神也其後其長明の作  
也其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也

院の葬

法号 東陽院壽阿弥院佛号南和尚

活末子嘗聞和尚年七十九の形也其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也

鶴屋南北

釋史の作名を號尉也其高研所住也又其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也  
其家号を元也其阿弥の形也

狂言の作のし業せし三戯場を執る事一千余年文政十二丑  
年十一月廿七日没時年七十五也本所押上長善寺山  
者慶寺ふ葬る法皇 一心院法念日遍

或人曰南北の葬或は四若の磨をせし差は形ひして寺ふ至り地  
内小麓實の切り茶をを補理て云ふ門才亦あまを為無きか  
市園子を市の皮ふ色を地水か 寂光松後万歳し云ふ一冊  
に葬送の人え出せしとを牛本とて 又古南北の生に昔有速せしを  
又日比邊言ふ已狂言を作し葬れは指を出せし可磨之と云れ  
昔皆きし一者ひ故に死を初め云ふ如くし一寺へ至るに  
云えりりり 又南北一周忘の事師し忘るるるのつし種ふ戯作  
せし為出ねは是の南北の孫鶴を孫吉云ふ昔有速せし云  
男何の俳優者恒東鶴十市云ふし 一 鶴屋を辞しし深川仲所  
小居作しし直江を主を南 小居作を業せし 又在狂言作者し云ふ

本所押上春慶寺の連の所、墓碑の表

一心院法念日遍 窪公羽南北家

○鶴屋南北と名を存、猿楽院故何を窪屋氏を托し名を承れ  
つき滑稽を好みて人を笑つすを志せり終る歌舞伎の作  
者を形する世のほつと大なる名を何しす安永四年を以て櫻井  
へ出初め歌舞伎作者の中を以て松群のや何れを十種曲形より  
をくくし一人の心か形しんを要せりされやふ其のむむを  
らひて父育形ししつひてうづから居りしや何れ文政十二年己丑  
丙辰月廿七日自年七十五也云ふ切り後三ノ戯場を作者た  
る事一千四年形し死す也形しんはるるをさるる事其寺をひひ  
つひて市らく我々一大事周縁を祝ひ形るるし一若のく  
古ふ水を何れあめしんの名開きてみるおもしろき古とん  
し志すし何れ志すくの人よのみ及て是を守る事



中つひて目を眠りぬをそつち志ぞくらくらりつて衆を閉  
 らまそ見れらるるあふ死出の門書後下歳やゆきてまろ  
 ろうそそれの方歳唱奇を禁まてそのせして四年のやうな志  
 しつゆられつてしるはてしなく最後の開秘形を金で  
 せつてみまのまゝとひてきつる其後むつてまゝ押形を  
 度々考めてゆくむづかしいや何らうらやまを但南北といふ名に  
 おゆれ代形のとて形を何やめて人ふゆつり何たるか形を  
 存す樹同、作又目其事をまて是を記し、寔世祥と云を  
 刺し文改し之唐宣宗年閏三月建之真にまを南勝  
 田豊岳産を孫を帝や連名ゆ  
 さまさ〜の著述の男をまを又と孫を帝、知れらるる南の  
 名を利利せしや〜  
 ○墨川亭云文紀の初高初冊の婉尉命をいつる戲名として著

たり松録高研話を三冊子何ら其南北の作とまを或は人  
 せもつ〜  
 孫の膳田豊岳をよまれ知りし馬をよ〜す向高研理を  
 武高亭より形りてまを蝶樓を移ぬ

瀬川如鼻

芝居狂言作者之狂言堂や皇をまて新法形をまて麻  
 川政考の知旅とまを比戲場を諱せしと云

著述

徳様借語 英泉 木曾義我仲興居録  
初五二五 英泉 七小冊 中許 英泉

白頭丸柳漁

狂言作者松村勘十郎と云著述の冊子ふ柳漁尾を名

をよせしむし何れ又清の楚陽人門人駟亭駟人の名なり  
或は戯子殿川政考の存を信じて著述はせしむるなり

葛葉山人云二男を藤田順茂と云

戯場の狂言作者初免藤田全居と云は後二代目也  
五瓶と改名して程形と後年又改二と卯年七月七日  
形下谷尾と云 寺の荒れ

法名 五木舎首の末居士

又梅柳山本寺境内の辞世の發句の碑あり

秋風也今度しを桐の一字末ちる 葛葉山人  
著指し并梅花地内云ふの碑の狂言堂真意山東系傳  
多川考云ふ人世話人なり此の勸化帳に在狂言を云ふ  
江戸中へ移る程成就せしむる

松島半二

狂言作者形 俳優者初末秀佳 三代目分名を何れと戯作

宝田千所

狂言作者の名恭里通称中川全を敵と云ふ名長者所  
小人氣屋の二席を云ふ

向米樓飲堂

神田白壁所云の傳を形ししと云ふは産業を破りて戯作者  
を形し續堂間人なり又本蝶山人と別年在又狂言作者  
と云ふて室田壽命と云ふ天保七申年冬病て没在

柳島町在境内に  
辞世の狂言の碑あり  
或は中川臺形なり  
考ふ  
又辞世と云ふ程文字  
是よりむしりの  
人の口伝を云ふ

花笠文京

文雅云  
角柱云作者之形  
豊高其花と云

初筑北井所不任所 其を樂南之居業とせり 牛比日本稿重  
所不任所 勸屋南北の門而入て 狂言作者之形 花竹之畧那  
也のふまに 狂言所之居を移せり 一年俳優者屋上梅草の  
得る浪花を奪う 勢被地止りて 代作を古作中居の代作  
を奪ふ也と目し 狂言之甚後居居お陽りし 聊障水之業  
何れ之戲場を辭去る年 初八月此古作の古を世不認ん  
也之引れおてり 所之離水又少重合を強し 代作金天  
作の居を披奪居無字の著述之を梅草之居を能く之  
一白儒生東條琴其臺之在るは是なり

林屋林泉

本不林所不任所 初筑林を自説也 牛比二世庶野武九其の  
元禄年不の也 改居在 怪撰歌の元祖也 牛比二世 頗父狂行の  
後世の居人

其の四也 狂言之 狂言又也 義受の一曲をよる 天保大巳未  
年 卯月利登り 林泉之 改居り 又修也 形之 曰居林を自説  
也 改居在 天保十三年 二月 没也

著述

- 先閑而三升、世思 文政七年 用屋画
- 帯屋控蝶三世談 六文政八酉 国次西与板
- 歌討新権之論 六文政十丑 又政三丑
- 怪談者雜多 初二天保上之居 三四五十二 不片等

式亭門人

樂亭馬笑

著述

- 古今亭三馬 樂山人と云る 漢字田所也 牛比二世 往之四代目 亦本名を更しつふ
- 一亭 三生 漢字東仲所不任所 狂言業 牛比二世 俗稱三馬 加美系 其の居在 利登り
- 居小不知

此三人ハ式亭田門人ヤリ

福亭三笑

日本橋邊の人ヤリ

益亭三友

日本橋邊の月夜九喜楽を蘭人の子

福亭三笑

年止居住生自師著述ハ仇之字

一亭三子

藤九喜楽を齋く書ヤリ

徳亭三孝

石川屋の書ヤリ

里多々子

雪亭三夕

席の所ヤリ

匠亭三世

尺詠撰内匠ヤリ

春亭三曉

画工国直ハ兄形

春亭三曉

姫路屋中ハ通稱石川郡作ヤリ

一亭三樂

...

三蹟 為永春水也

十返舎門人

大原市女

喜和リノ文化年万造リ

東寧舎一阿

今年万中

東燭舎一阿

五返舎半九

...

全鈴舎一空

...

...

九返舎一八

半返舎一朱

愚舎一得

唐立ニ別ニリ

十字百字三九

大徳寺所不居屋せり今行方不念故人九之徳身之三九也之徳徳を常井風体といふ下野不

一九段法甚男ふて元月十返舎一九の蔵居をたつらる  
牛島長尾寺境内の碑に故一九の男又此一九其余の  
門人等其美しきの形を原

。碑銘

形つての人りの異形をとおしよまをたを形をた  
つらふに福やとらふもたう名あのみよのたをたをた  
つらふ酒形を原

内括の骨居をよ、稱ふて扱ふ百字も生延りん

碑陰

十返舎一九  
應需憲南書

曲亭門人

標亭琴魚

勢州杉板の人形、著述、京山子、備述、少儀、作、風月、著、記

みつきそ 風月法能をいふもの何う又馬琴著述の青砥若個控  
後葉の三輯を序の天保三年卯十月七日法生真年  
四年杉板富光山新禮寺ふ焚方

法号 標亭道者

山嶺玄亭琴我

贈京傳先生文。曲亭記。戲贈利倉屋伴衆文  
贈上戸文

此四系板下迄形を刻あり

琴川

敵討甚三縮 文政五年

直身驥德  
琴枳規矩  
節身琴驢

岡山鳥也

為永春水

著述の事  
○梅  
○人  
○龍音信士  
名真高在訓身也早一鶴鶴三輔を移在原書貫中して  
青林堂却後を長政而やつ不初免武尊の門に入る三跡を号  
し居在振振身と号又故人楚儒人あゆみひて三代月  
楚儒人なりし故何れ其居を山一父政十一子年春水也  
改む居を新なるなり初免橋式と通由所不侍又希若橋  
不居又牛島へ移り下谷池に端を移る岡之蓮池尾の早何り  
免の神田多所不侍中比糶古と形し一廣を各耕と形し金就  
山人物子後内の住しや号は著古政の形りなり又廣を著

戲述を何しと時毎合ひて大流のせし其書を人佳也  
唱ふ天保三壬寅年公より飽板御付られ皇まに外を考し  
し程能く後世り

岡山鳥

名長盈字哲甫号を市戸又舟前舎を云通稱を鳥  
園共在舟の田名を了神田四所近藤君に侍つ唐唐人  
しと駒は古番所不侍古園の率と再又曰ま不帰系也初  
免曲亭公羽の門人入節身琴驢をり狂歌を嗜ひまこと書  
をりしと備古はまの命古人或尊と交り保しと門  
外の小也

著述

歌路春鈴采譚

ニ文化四  
豊彦堂

廿三夜待

ニ文化十  
國分

善光寺諸

ニ片房塚  
文政四

如月初午

漢泉塚  
文政七

水中魚論五釣話 揚子一面大當利  
江戸名所 花暦 四冊文政十年刊行 雪見画

龍亭 輝大

下谷唐徳侍門前稻荷に侍 揚子を嘗て業として其内命  
の云云子に之甚るを八氣として居を辨して御子信法院裏  
の為に侍 再訪取所河岸通る御物を著述 龍亭本のみこと  
女侍の一年篇を能くす都一表世也云

著述

花暦八笈人

初編二三巻 文政四七葉 龍亭

大山道年夢を駢言

隅秘考和名入

古

牛島土産

伊勢屋年三才廣人

六甚外人間百事 嘘計 后編 著三馬作

串戯百醉

后編 著一九作

獨行行巻

千代春道

元岩余所の住て居る馬喰所は福水に板下書橋本徳親之  
又浮世喜楽を以て戯居をもつて編たり何れ作らざるを  
夫節の秘考古抄の板下を著す十八歳の比のうへに能熟を  
せ又改八箇年病て居る

著述  
復讐録小車  
文政五修筆  
春亭画

晋来前玉粒

姓益庭居林居居を益庭守又来前也云い瀧女を業せ居  
馬喰所四月に侍 後大徳寺所我及御の文政七年三月  
刑罰其甚るを樹周に在部を照らす今八箇年其全中  
取説あり居を之徒て二世司る全史也改居今十三年  
九月百箇年男何れ著書門人として玉見也云

東西尾南北

文記五

一書ハ朝余力蔵也

芝金控所ハ住セテ、原ハ吾妻橋ノ前市向ニ居住セリ。剖削ニモ  
疑念若人ヤリシヨリ、画工妻翁、後モ五物語モ、黒雲ノ身ノ信  
形、又政十丁亥年、没セリヤリ

神瓦蓬跡

少石ノ<sup>後</sup>住セ、由自ニ馬き、みノ中、又彫刻モセリ

著述 天録奇遇 三〇八丁 牛車 猶何多也

鬼 卯

栗枝真ヤ、早生、在、日、極、人、之、著、述、本、教、多、行、京、師  
浪花ノ著述、之、發、見、セリ、煙、子、を、強、高、ニ、業、ト、シ、テ、故、著、  
障子ハ

世の中の人ヤ、多、著、述、ノ、リ、何、モ、煙、子、形、ノ、後、不、志、モ、流  
欺、誑、ヲ、在、歌、を、自、著、ヤ、レ、何、モ、中、國、ノ、或、年、自、白、原、業  
翁、著、述、通、行、ノ、事、而、此、在、歌、を、所、信、行、ク、モ、原、業、ノ、下、ニ、  
此、年、根、岸、著、述、ノ、事、而、其、代、著、ヤ、レ、何、モ、  
一時、形、真、ク、消、息、ノ、門、人、た、ラ、ん、ト、モ、之、を、乞、ヒ、テ、  
固、ク、辭、セ、リ、ヤ、キ、ヤ、リ

揚春首亭慶賀 今泉戸守

下谷池ノ端、妙思寺ノ裏、門ノ筋、向、一、丸、形

著述 昔今川 藩衣セ、之、ノ、業、師、ノ、著、驗、九、ノ、ヤ、十、ノ、甲、也 嘘初

江南亭唐立

通稱中田慶作、之、不、原、市、街、ノ、住、セ、幼、ク、在、京、を、始、メ



故十返舎の巻者一治やうの院所お藤屋の郎や何や又人  
田尻屋の郎や何や又やうの直比戲作を藤屋の著述  
を貞亨初作の文政七年刊行也

訛謄紫糸色揚四冊 国書

### 忍岡常丸

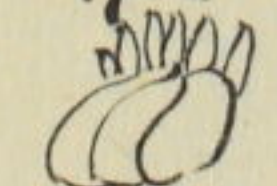
下谷上野町に居る常陸守を以て名を聞かすは是れ藤屋の故人  
下九の好の活衣地を年毎に別々に其形を藤屋に  
著述 全成木後省其藤和歌 文政七年甲申刊行 国直馬菜多和

### 慈川春所

下谷坊本町の住居に間々有る文書堂言房形に比の活衣  
家の別紙にて隠居の用ひたり又醫師形に比の活衣

是形うん故書所門人少く慈川春所といふは自ら之を

### 玉樓花七条

北廊五の山言中抱の妓之彼亦云の宛之其形  斯の妙  
是を冊子の表紙の模様を用ひたり著述

宿縁奇遇梓物語 文政七年刊行 英泉画 龍威堂板 是の其書戲  
代作せしや何々入つてさ水之形や著述といふ珍  
り常れ載せり

### 美圖垣笑顔

愛育亭と早通和義の甚く布を以て初加賀所の書  
屋之活衣形を形し涌泉堂と早在原在形を味之書  
形を形して涌泉亭直傳といふは此年其因所の福伝

古今卷を序

著述 自序也 豪傑譚

一 華鹿英泉

名義信字英泉 漢裔也 号一又云名翁也 号生通稱也  
田善治年中之小茅坊所植木店不任其子馬を能くす  
戲作を形して一筆鹿の号何と嘉永元戊申三月七日  
乙未年五月十九

三 真亭春馬

俗字山若所不任其子初名春馬系京師者今月の妓様之大  
父字を市之南 善治年中之小茅坊所植木店不任其子  
を如深茶圃成といふ後元成といふ俗字鹿看村之弟子之号

故十返舎五の門人をして九返舎一八を以て其を後八文字を自  
号せしめ又二代目十返舎一八を以て其を後八文字を自

著述

松竹梅多氣 中本天保十年刊行あり  
壺翁詩 同今馬初三三三三

五 柳亭徳升

本所法恩寺前所不任其子一後在在所者今月の初ハ鎌倉何  
岸之代を遷居して豊高を其甚死すといふ一後衰して代官布を  
を法業也とす故の人の本徳を不文致五年の法軍中徳曲山  
の門人なりと名耕は今本家の初名ハ辨慶者市川三井の名を  
かりて著述せし徳升の号を名りての形 又政十年春在  
弘治の合を催せし一近曾戲作を廉して四日市市東段下の  
中段中形水と嘉永六年七月七日自法在乙未年六十一歳上宗  
伯寺不葬也

法名 五柳院徳布日輝

式亭十三馬

本所三月の佳辰に故三馬の男中より山家僧の別名を承りて  
業や中流稱席之節より不文死九主申年生れ又改十三馬年  
十八少老初著述何れ巻末に式亭席之節に記せしむる保  
五甲午年十一月三馬の夜一父の性を承りて父少老し  
り久しくすし二代の名を輝ゆするよりおる也

著述

喜樂哀樂堪忍代名

六文政三  
同書馬年板娘曆振袖姑山口板

花紅葉吉野花田

全本  
豊之目本朝班猫傳室信

仇競竟氣地敷鞠

六文政  
重政

山東京山

岩瀬氏名百樹字鉄梅録筆堂也号一又方半居士也号之号  
を以て山やつと初名利了也移し後利松とて疎仙也及也系  
竹海山屋も伝へし詩一之京橋大に書あり住し由之先系傳の旧宅  
あり移して山家才の別名を承りて又京刺を形して老筆堂也  
天保九戊戌年六月三日齡七十ふりて利松年加の由  
命を傳せり

刺松辞

筆跡強説ありて一筆一尺思ふに他自善筆を以て  
り或はや又未だたの発句なり

十徳を七才不羽元也松の七身

天保九年八月朔日採筆七十野叟山東京山

岳亭丘山

通稱を弁老せしりとも殿名を堀川左平甚長といふ半路  
岳亭定園やつと在歌を著の村布の字の馬を堤耕栄

任事坊子學少治北溪の門子なり又北商の從從守初免青山史  
少居之居史修言所少住今居第少也

著述 狂歌奇人傳 水滸七年花英泉画

忠孝水水川 三自里  
文政八年春

松亭金水

名定保通稱中村原人々不備書之初免神田之和所住之  
自跡の所た中北治等年少也後少修言所三月北  
及尔居又中附亦居少物之屬作を智也

著述 中村合卷等類多行

**補**松亭門人梅亭全我子云松亭金水幕府御統士之牛过  
葛原店不生水前原八也何水也之突源命形後經年

少改也終焉之代下谷長者所形于時文久二戊歲十二  
月十日享年六十八歳年过禧所日蓮宗大法寺葬

法名 不悟院金水日松信士

著述 松亭漫草 積翠閑話 皇国性質

日本百將傳 孫子童觀抄

日蓮記 十冊卷前画 忠臣男朝倉日記

秋色後難類 牛牛 意小浮身中牛

蛇物誌

二冊 島亭馬

通稱青治市也所与山崎馬在事の男之深川右石橋  
少住居其家也七国構也其也武在甲豆駱房徳の  
七分を見度也故之狂言を嗜也之伯宗金小就之松亭

橋本年を以て為る樹月小学にて蓬萊山人を以て又角觥を好む  
て吉田追風の行事の業を形しつゝ文政三年二代目馬場を形  
り又弘化三年三月近香門を多のを形しつゝ牛村を形  
るりの文作何

著述

當世全副傳 二国名画 相撲取組因絵 一全上  
相撲 全上 茶番一夜附 二国直  
関取名所因絵 全上 懐中鏡山開 六国名画 陸前之孝記 六国名画  
角力水滸傳 文政十三 新堂葉門筑紫宮 文政十一  
戲場橋本當現集 西と文政 活全副傳 前後四冊  
妖狐天網島 六国名画 俳漫暗人傳 前後四冊  
西歎忍夜様 八国名画 大和深對之振袖 八国名画  
返咲難波裏梅 中国名画 芝居細見 三卷書

雪 麻呂

墨川亭を以て高田屋之藤平がて通称田中善之布を以て墨  
亭月磨が門を入て画を以て後戲作者を形しつゝ作風新  
奇の似し

市福亭宮守

市福山人を以て又福亭禄馬を以て今市亭西馬を以て  
西宮新を以て市福木所を以て自の繪を以て河内之文政十三  
の市福の似し家喜之屋水石所の後流の家を以て形して  
久々市福を以て後流を以て形し又戲作を形し能慶者原  
川路考又山井繁美の居を以て出世

乾坤坊良齋

通称良御神田村田所の感事申梅天勘平の男也初免三笑  
身可樂の随ひて高橋を有て後良御申つては後軍務の  
後多ありて今も存す及也

著述 黒雲を布雨神譚 初編二編

柳亭門人

竹立亭仙果

姓大宅名廣通字輟有を号し又物之山人招祿翁等の戲号  
何通稱を強き布初名也云ふ又高橋村在りて名故我字民則号小  
五條品川噴飯  
しては世々屋敷を重き親勢自賦に住りて代勢田大神を  
神領の里にたり幼き時所謂詞多後部右近名改を師とす年  
習素徳を形長形を藝屋公羽名辭字取甫通和録木常介  
屋敷名傳臣明倫録教授役り弟子を  
り和漢の字を研究し又昔高田主名春村通和馬川作年在り  
堀七の守彦手とて世に傳ふ少物て字云

狂歌をいふ四世の尾の早を傳らる又和歌をいふ高橋家  
牛柄の門人也傳枯りて家衰へ

其の著述を有て活計を自らし不戯作を意に何れも  
也是未如之仰也巳矣又つふ竹立亭の早清人李笠公羽情性  
を欽慕ひ又師公羽種彦の通音をせり又仙果也  
名告り縁り十歳より此舞田神宮寺の住侶金障子  
師余を重りて大形柳一を贈らる高ら寸圍寸余ふ  
しと宝珠の幣に似たり崑崙山の種形をいふ右人昇魁  
少高を治大也此ひて亭号とせ則其不徴ひて云ふとて

下竹の屋  
蛇足の人  
補

三世柳亭種彦

公翁高富の家不生水石直吉といひて旧幕の居たり紫  
翠山房又轉々堂一葉人若と云藍泉の魚名なりとて後年

実居形多し天保九戌年五月十三日下谷世俗施徳生永知  
谷を執三事といふ五つもの比和僕の小説牌史を毎々雑書  
見せしもの形々世年多うて戯文を著し四條風の書を著し後  
南宗の修多福の茶々谷村氏ら直指所の門下俳諧甚用堂  
の高介所といふ方の英傑行々常々風月を愛せしもの  
の通世の客の接する事を好み常々雅友其の戸を訪ひ  
者知す頓智秀少し之幕政の未政其の發起して興  
せしふ事此多事の流りし市井の多事して此連ふ加り  
翁も又此及不狂の興画の趣向意表の出て高点を以て連年  
の人々を懐き維新の始を帰商して業研堀の住居根  
少福の明居三年閏十月居居既退隠せし今五年東京元  
大物所を於て在東京日之新居を築見よつて知己の人を翁を  
居居より招き編輯の補助となる此時又之根居の住居を八

年日新社を退きて東京絵入新居の編輯總轄の形今  
九年該社を辞し今十年京極の地を住居し大東日報  
編輯を局七一年を短く東京の居り今十二年八月  
京極彌太郎の所を居を構ふ明居の始り此年三月居を  
移す十五余度転居の別居し茲に起る今十五年丁月  
先人の名を嗣きて柳亭種彦と改む今年再々下谷此  
花新居の編輯に従事し約居を帰京し歌舞妓新居を  
絵入新居の御年形多々種彦の著せし病の形十七  
年九月北谷高親千束村の地を移し病日少事頭を以  
て之を治す天命定り何れも月日此病代行を以て  
同日形を十八日十八年生居之時日少の病苦を忘る如く包  
然や之黄泉の客の形少く九日廿日著脱下形の病苦を  
正定寺に葬りたる年四十八歳病苦自身のたれ切を惜み此

也歳を度けり蓋泉居を自ら所名を附しめたりと  
まゝに遺れ死ふるんを詠せり目出なる者を見ふ足  
諱世の句はたの氣を何

原々の君を多く秋形とて不古翁の

諱世の做ふ

都のつを其の山とてわ字居るまを柳亭程久

程久の二とてり信大所りの和録を

<sup>補</sup> 二世為永春水

為永春水を澤崎八郎通稱定房と云宗對馬守藩主  
一々文政二戊寅去る初世永春水の門下者頌とす

著述 時代鑑

此分つを何

<sup>補</sup>

万尋應賀

万尋應賀を通稱服部幸三郎と云文政二己卯歳  
生れしと父は上総守長柄郡の人なり明を去るに父は  
来り長柄句當と云應賀の故何と常陸下妻藩主并  
と云るは侍と素より昔田白家よりて戯作の傍書と照家  
在り其本番等より戯作を好むと云強形と能く知れり  
為る大い其財を散せ附て奇形何の何の時定なる所  
下野火の事を焼くたると何の甚大の子哭叫ぶを應  
賀の母つと云願ひを應賀の命とて戸外に放棄せよと云  
應賀胸中をいへり今を棄れり徒ら形の子供お  
のるに殺らせぬんすを不便おれり又母の命もいと  
何とて毛固りせり此事を以て平常の為人を久  
たふ足るを其形と云當時病ふ

三兄弟所



著述 親伽八相記 錦皇堂和泉宮重頼

**補** 梅亭全集

梅亭全集又化之白山人半死半生の戯作何れ通稱瓜生  
政和幼名熊次郎と云ふ幕府の臣西条權左所吉田家小文  
政四年己歳生る吉田家、柳劍流の擊劍の師家形あり  
歳十三の比より武藝修行、為諸國を短歴せらば、坐落  
瓜生家をお歸りて歳十四五ありて、梅亭全集の門不入、戯  
作を著らば全集性来物、頓着此は、梅亭全集の依氣何れ  
人の為る家お餘裕ありて下巻の書を讀み、更らふ意  
せ先ず君子の餘風何れ全集自ら戯作のふ人お對、不  
実を著せり、新伽八相記、官形を先年圖々  
珍間驛屋園子お編輯、徒事滑稽又を此の頃の當時

此人の存出するもの形を、居任の他、少名川指ヶ名所と

著述 七喜人 三冊五編 大和を著す

与三の月柳橋 三冊五編 又難堂子をお

凡身 四三編 著す 花多風月 四三編

西屏新書 三冊七三編 身著す 祝短心抄

和歌何れ何れ

**補** 梅亭全集 梅亭全集 ありて、梅亭全集と全集  
其の之なり、おのれ平常あり、深うて、梅亭全集と全集  
不を著す、おのれあり

明治十年四月 梅亭全集の何れ 御



戲作小傳目次

○因清兵衛

○

